

※文字の大きさは Meiryō UI /12 ポイント以上とし、行間・文字間、上下左右の余白は変更しないでください。
 ※具体的に示したい図、写真、表、グラフなどは、(写真1) (表1) などと文中に記載し、右ページに(写真1) (表1) などと表記の上、貼り付けてください。
 ※文章と図等を組み合わせながら作成することも可能です。各項目の枠の上下幅は変更可能です。
 ※いずれの場合も、必ず A3 片面1枚におさまるように作成してください。ファイルサイズは5MB以下としてください。

エントリー学校名：福島県柳津町立西山小学校

活動名：

共に高め合う子どもの育成

～現職教育の実践をとおして～

解決すべき課題：

全校児童数が少人数(20名)のため、複数の考えが出にくかったり、考えが固定化されてしまったりと、子ども同士の対話が活発になされることが難しく、学び合う力が十分に身につけているとは言えない。学力については、全国平均並であるが、国語科の「読む能力」と算数科の「数学的な考え方」において、全国の正答率よりも下回る学年が多いことが課題である。現職教育をとおして、全職員で課題を共有し、解決していく必要がある。

目標・方針：「共に高め合う子ども」の育成を図るために、効果的な主体的・対話的で深い学びの授業の実践研究を主に進めていく。そこで、子どもの学びが深まる主体的・対話的な学習活動の工夫の視点に沿った主体的・対話的で深い学びの授業を実践すれば、「共に高め合う子ども」を育てていくことができると考える。授業実践の具体的な取り組みとして、課題意識をもたせる工夫、主体的な学びの場の工夫、対話的な学びの場の工夫、深い学びの工夫を考え、実践していく。また、日常において、自分の考えを伝え合う際に、必ず理由や根拠を表現させることを一貫して実践することで、さらに対話が活発になり、学び合う力が身につくと考える。

活動内容：① 授業実践：一つの視点に沿った具体的な手立てを設けて授業研究を行う。(資料1)

② ワークテスト・NRT 学力テスト・ふくしま学力調査・全国学力・学習状況調査：児童の学力を教師及び子ども自身が分析し、授業へ意識的に生かす。

③ 各種教育活動：学校行事、全校のつどい、児童会活動などにおいて、子どもの主体的な活動を促し、学習の成果を発揮させ能力を伸ばす。(資料2)

④ 意識調査：子どもの意識調査を年2回(6月、12月)実施し、変容を分析し、授業実践に生かす。

活動の成果：① ワークテストにおいて国語科と算数科ともに全学年で全国平均以上の到達度であり、昨年度を上回る観点がほとんどであった。子どもの学びが深まる主体的・対話的な学習活動の工夫の視点に沿った授業を実践してきた成果と言える。② 全職員の共通理解のもとに日常生活において、必ず児童に理由と根拠を考えさせ、表現させることを一貫して行ってきた。そのことで、児童の中に、理由と根拠を表現することが自然となりつつある。また、児童同士でも理由や根拠を問う姿が見られるようになり、対話が活発になった。③ 意識調査において、授業の内容について「わかった」「できた」という実感が持っていること、「自分の言葉でまとめる」ことに慣れてきていることが考えられる。各学級ともまとめの時間を確保し、自分の言葉で表現することを大切にしてきた成果と言える。

アピールポイント(アイディアや工夫)：

- 授業実践において、子どもの学びが深まる主体的・対話的な学習活動の工夫の視点に沿った授業を実践することで、「共に高め合う子ども」を育成することができる。
- 日常生活において、必ず児童に理由と根拠を考えさせ、表現させることを一貫して実践することで、児童が理由と根拠を表現することが自然となり、児童同士でも理由や根拠を問う姿が見られ、対話が活発になる。

(1) 子どもの学びが深まる主体的・対話的な学習活動の工夫の視点に沿った授業の実践(資料1)

第1回授業研究会 第6学年 算数科の実践

【目指す児童像】

全校	共に高め合う子ども
高学年	課題に対する自分の考えをもち、根拠を明確にして、相手意識をもって表現し、対話をとおして、自分の考えを広げたり深めたりすることができる子ども

【今回大切にしたいこと】

円を含んだ複合図形の面積の求め方を考え、言葉や式、図などを用いてその解決方法を説明したり、他者の解決方法を比較検討したりして、学習することの楽しさや数学的な考え方を高めること。

1 単元名 「円の面積」

<資料1> 第6学年算数科学習指導要領

2 研究の実際と考察

視点：子どもの学びが深まる主体的・対話的な学習活動の工夫

(1) 課題意識をもたせる工夫

<手立て1 ウ 解決に困難性がある課題>



円を含む複合図形の面積を求める課題を提示し、円の面積の公式をどう活用するかという困難性をもたせ、課題解決への意欲を高めます。

(2) 主体的な学びの場の工夫

<手立て2 ウ 具体物、半具体物を操作しながら自力解決>



赤色と緑色の半透明の円の1/4の図形を重ねるなどの操作をさせることで、解決の方法を視覚的に捉えさせ、自力解決に導く。

<手立て2 ウ ベア学習・交流学習による教え合いによる自力解決>



自力解決の時間を十分に確保するとともに、ベアで互いに考えを伝え合ったり、解決方法を相談したりすることで、自力解決に導く。

(3) 対話的な学びの工夫

<手立て3 イ 具体物、半具体物を操作しながら自分の考えを伝え合う>



iPadで撮影したノートの画像を活用することで、自分の考えを相手に分かりやすく説明させる。

<手立て3 エ 考えを共有化、比較検討する場づくり>



互いの考えの説明を聞き、よさや気づいたことなどを話し合わせることで、自らの考えを深めさせる。

(4) 深い学びの工夫

<手立て4 ア 自分の言葉でのまとめと振り返りの場づくり>



学習のまとめを自分の言葉で書き、学習したことを整理させることで、自分のものとして定着させる。

3 成果と課題(○成果、●課題)

- (1) 課題意識をもたせる工夫
- <手立て1 ウ 解決に困難性がある課題>
 - 解決に困難性があったことで、「どうすれば解けるのか」と自然と児童の中に課題が生じた。
 - 解決に困難性がある課題を解けたことで、授業後、「もっとやりたい」と意欲が高まった。
- (2) 主体的な学びの場の工夫
- <手立て2 イ 具体物、半具体物を操作しながら自力解決>
 - 赤色と緑色の半透明の円の1/4の図形を操作し解決の方法を視覚的に捉えさせたことで、自力解決へ導くことができた。
 - 操作するまでに時間がかかった。補助線を入れる、切ってもいい、折ってもいいなどの操作の仕方を指示するべきである。
 - <手立て2 ウ ベア学習・交流学習による教え合いによる自力解決>
 - 子ども同士の分かりやすい言葉、質問しやすい雰囲気により、自力解決の手助けとなった。
 - 自力で解くことに固執してしまう児童もいた。互いに教え合うよさを実感させる必要がある。
- (3) 対話的な学びの工夫
- <手立て3 イ 具体物、半具体物を操作しながら自分の考えを伝え合う>
 - 赤色と緑色の半透明の円の1/4の図形を操作しながら説明することで、自分の考えを分かりやすく伝えることができた。
 - <手立て3 エ 考えを共有化、比較検討する場づくり>
 - 考えを共有することはできたが、比較検討するまではできなかった。自分の考えと何が同じで、何が違うかなどの考えをもたせることや、対話の視点を明確にする必要がある。
- (4) 深い学びの工夫
- <手立て4 ア 自分の言葉でのまとめと振り返りの場づくり>
 - 自分の言葉でまとめさせ、授業を振り返り整理することができ、本時の理解を深めることができた。
 - 各自のまとめで終わってしまった。全体でのまとめを話し合う場を設けることにより、本時のねらいをしっかりと押さえさせる必要がある。

(2) 日常の実践(理由と根拠を表現させる。)(資料2)

日常の実践における取り組みの変容分析

授業だけでなく、日常生活において自分の考えを伝え合う際、理由や根拠を必ず表現させるようにした。また、授業で学習したことや委員会活動などの発表をする機会を多く設けるようにした。

① 週のめあて発表

○ 週の始まりの朝の会で直日が週のめあてを決める。その際、なぜそのめあてにしたかの理由を必ず付け加えるようにさせた。また、給食の時間に全校生の前でも発表させた。



② 学期、各種行事でのめあてや感想発表

○ 学期、各種行事でのめあてや感想発表の際、そう考えた理由を必ず付け加えるようにさせた。



③ 授業で学習したことの発表

○ 給食や昼休みの時間に授業で学習したことを全校生の前で発表する場を設けた。



④ 各委員会の活動

○ 業間や給食の時間に各委員会の活動や発表をする場を設けた。



⑤ 各学級の発表

○ 全校のつどいで各学年の発表を年2回ずつ実施した。



【低学年：好きな物クイズ】 【中学年：七夕クイズ】 【高学年：音楽発表】

⑥ その他

○ 保健室来室時、いつ、どこで、どのような経緯で、どのようにして、どのような作用が加わって、そのけがをしたかを自分の言葉で説明させ、客観的に自分の行動を振り返るとともに、表現する力が身に付くように努めた。

⑦ 日常の実践における取り組みの考察

- 全職員の共通理解のもとに日常生活においても、必ず児童に理由や根拠を考えさせ、表現させることを一貫して行ってきた。そのことで、児童の中に、理由や根拠を表現することが当然のようになりつつある。また、児童同士でも理由や根拠を問う姿が見られるようになってきた。
- めあてや感想発表での理由や根拠の表現において、はじめは学年しかできなかった。しかし、各場面において継続してきたことで上学年の姿が手本になり、下学年も発達段階に応じた表現ができるようになってきた。
- 発表をする場を設けたことにより、目的意識をもって学習に取り組み、さらによりよいものにしたという意欲が高まり、深い学びへとつながった。
- 活動や発表する内容などを目的と理由を明確にしながら児童に話し合わせて決定させたことで、児童の主体性が育まれ、意欲的に活動することができた。